

本科 1 期 7 月度

解答

Z会東大進学教室

高 2 東大 国語

高 2 東大・京大 国語



【添削課題】

出典：山内昶の文章 / 青山学院大学 02年・改題

文章略解

食物として何を嗜好するかは、各文化間で大きな差異が存在する。人類の食習慣は、通常その食物の有用性によって決まると考えられがちだが、必ずしもそうではなく、何を好んで食べるかは、それぞれの文化の中で構築されてきた固有の意味体系での価値によって決定される。このことからわかるように、人間は自らが属する文化の意味体系によって対象を価値づけて捉え、それに従って生きていく存在なのである。

解答

問1 a || ししよく b || 忌避 問2 イ 問3 オ

問4 対象が可食域に入るかどうかは人類の生物的条件によって決まっていますが、何を嗜好するかは文化的な違いがあり、必ずしも生物的条件には依らないということ。〔73字・解答例〕

問5 ウ 問6 ア 問7 エ

特別問題

文章略解参照〔188字・解答例〕

文章略解

これを指摘する人は少ないが、科学者はあたまが悪くなくてはいけない。この場合「あたま」の定義が問題である。尋常茶飯事の中に不可解な疑点を見いだし、その究明に苦しむことは、科学者にとって重要必須なことだ。又、あたまの悪い人は前途の見通しに楽観的で、難関に出会っても存外それを切り抜けていく。着手してみると意外な難点に出会うこともある。初めから駄目に決まっている試みから、試みないとわからない糸口を見いだすことも多い。

解答

問1 ・論理の連鎖を辿り、混乱の中でも部分と全体の関係を見失わないよう、正確で緻密な頭脳を要する場合。

・紛糾した可能性の岐路にあつて、道を正しく選択するために、前途を見通す内容と直観の力を要す場合。

問2 ・常識的にわかりきったことと思われる尋常茶飯事の中に、究明すべき不可解な疑点を見出さねばならぬ場合。

・前途に多くの難関が横たわってはいいても、その難関を切り抜けていかねばならない場合。

・初めからだめに決まっている試みの中から、やってみないとわからない新たな糸口を見いださねばならぬ場合。

問3 頭で考えたことの実現を求めるだけでは、自然の側にある真相の究明という、自然についての科学ではなくなってしまうという

意味。(60字・解答例)

問4 先入観を抱かずに自然に向かうということ。(20字・解答例)

問1 まず着目しなければならないのは、第三段落末尾の一文「すなわちこの意味ではたしかに科学者は『あたま』がよくなってはならないのである。」である。「すなわちこの意味では」で受けられる、この第三段落冒頭からの部分を解答の根拠とする。

・論理の連鎖のただ一つの輪をも取り失わないように、

+ (また)

・混乱の中に部分と全体との関係を見失わないように

・紛糾した可能性の岐路に立ったときに、取るべき道を誤らないためには

↓前途を見透かす内察と直観の力を持たなければならない。

するためには、↓正確でかつ緻密な頭脳を要する。

問2

第三段落で「たしかに科学者は『あたま』がよくなってはならない」ということを述べた後、第四段落冒頭で「しかしまた」と話題を転ずる。そしてこの段落を「この点で科学者は、普通の頭の悪い人よりも、もっともっと物わがりの悪いのみ込みの悪い田舎者であり朴念仁(物の道理のわからない人、分からず屋)でなければならぬ。」と締めくくっている。従って「この点で」の受ける部分が一つ目の該当箇所。

第五段落「いわゆる頭のいい人は、……」第六段落「頭のいい人は、……」は、比喻により、頭のいい人の陥りがちな問題点を指摘しているにすぎないから、問1の解答にもならない。第七段落前半の「頭のいい人は……」も同様に、頭のいい人の陥りがちな点の指摘。後半「頭の悪い人は……」以降が、二つ目の該当箇所。

第九段落にきて、冒頭「頭のよい人は……」以降再び、頭のいい人の陥りがちな点の指摘。第十段落「頭の悪い人は、……」以降が三つ目の該当箇所。

問3 前提として「自然がわれわれに表示する現象が自分の頭で考えたことと一致しない場合に、」とあるように、「自然がわれわれに表示する現象」と「自分の頭で考えたこと」との対立関係が基礎となる。そして「頭のよい人は、あまりに多くの頭の力を過信する恐れがある。その結果として、……『自然のほうの間違っている』かのように考える恐れがある。……そういったような傾向になる恐れがある。」と述べられている。すなわち、自分の「頭の力」の方を重要視し、「自分の頭で考えたこと」の実現を求め、あり方である。それを「これでは」と受けて、「自然科学は自然の科学でなくなる。」と述べているわけだから、「自分の頭で考えたことの実現」対「自然の科学」という対立関係が浮かび上がってくる。「自然がわれわれに表示する現象」の方に重点を置き、その究明に努力することが、「自然の科学」ということになる。

問4 「(赤)裸」という比喩は、何かをきれいさっぱり捨ててしまうことの比喩として使われる。この「何か」を指摘することが重要。**問3** で見た「自然」対「自分の頭で考えたこと」の二項対立に基づく。「自然のまん中へ……飛び込んで来る」から「自分の頭で考えたこと」が、その「何か」である。直前の「自然は書卓の前で手をつかねて〔腕組みをして〕空中に絵を描いている人からは逃げ出して、」という部分にも、「自然」対「書卓の前で手をつかねて〔腕組みをして〕空中に絵を描く」ことの対立関係と後者の否定が述べられているが、後者の比喩「空中の絵」というのも、「頭の力」が生み出した観念の世界のこと、すなわち「自分の頭で考えたこと」である。

出典：『平家物語』〈巻第一・鹿の谷〉／東京家政大学 97年・改題

現代語訳

東山のふもとの鹿の谷というところは、背後は三井寺に続いており絶好の城郭（「まるで砦のような土地」であった。（そこには）俊寛僧都の山荘がある。そこにいつも寄り集まり寄り集まりして平家を滅ぼそうという策謀をめぐらしていた。ある時（後白河）法皇もおおいでになる。故少納言入道信西の子息の浄憲法印が（法皇に）お供申し上げる。その夜の酒宴で、（法皇が）この（平家打倒の）次第を浄憲法印にご相談なさったところ、（浄憲法印は）「なんともあきれはてたことです。人が大勢お聞き申し上げてしまいました。今にも（この策謀が平家に）漏れ聞こえて、きつと天下の一大事になってしまおうでしょう」と、非常にあわて騒ぎ申し上げたので、新大納言（「成親」）は顔色が変わって、さつとお立ちになったところ、（法皇の）御前にございました瓶子（「へいじ」）を狩衣の袖に引っかけお倒しになってしまったのを、法皇は「いったいどうしたことだ」とおっしゃったところ、大納言は戻ってきて、「平氏が倒れました」と申し上げた。法皇は機嫌よくお笑いになって、「者どもよ（ここへ）参って猿楽をいたせ」とおっしゃったので、平判官康頼が（猿楽を披露するために）参って、「ああ、あまりに平氏（「瓶子」）が多くございますので、つい酔ってしまいました」と申し上げる。俊寛僧都が、「では、それ（「平氏・瓶子」）をどういたしましょうか」と申し上げたところ、西光法師が、「首をとるのにこしたことはない」と言って、瓶子の首を（折り）とって（奥へ）入ってしまった。浄憲法印はあまりのあきれ果てたさまに全く物を申し上げることができない。かえすがえすも恐ろしいことであった。

解答

問1 平家を滅ぼそうという策略。〔13字・解答例〕

問2 けれ

問3 ②

問4 瓶子が倒れたことに「平氏が倒れた」という意味を含ませた新大納言の発言を気に入ったから。〔43字・解答例〕

問5 ③ 問6 全く物を申し上げることができない

現代語訳

夜が明けると、福原の内裏に火をつけて主上（＝安徳天皇）をはじめとして、人々はみな船にお乗りになる。都を立ち退いたときほどではないけれども、これ（＝福原を去るとき）も名残は惜しいのだった。（塩をとる）漁夫の燃やす海藻の夕煙、山の上の鹿の明け方の鳴声、そここの渚に寄せる波の音、（涙で濡れた）袖に映る月の光、草むらに鳴きしきるこおろぎの声、すべて目に見え耳にはいることで、一つとして感慨をもよおさせ心を痛ませないということはない。（思えばつい）昨日は逢坂の関のふもとに（馬の）くつわを並べて十万余騎（の大軍だったが）、今日は西海の波上に（船の）ともづなを解いて七千余人（となつてしまい）、雲の垂れた海は静かで、晴れた空はもう暮れてしまおうとしている。離れ島を夕霧が包み、月が海面に（その姿を映して）浮かんでいる。水平線の波を分けて、潮に引かれて行く船は、（まるで）中空の雲に上っていく（ようである）。（こうして）日数を数えると、都はもはや山や川が間を隔てて、空の彼方になってしまった。はるばるとやってきたと思うにつけても、尽きることがないのは涙である。波の上に白い鳥が群れているのを（平家の人々が）ご覧になっては、「あれであろう。在原のなにがしが、隅田川で問いかけたとかいう、その名も懐かしい都鳥であろうか」としみじみ哀れである。

解答

問1 A ぬれ B なけれ C ことひ

問2 (a) しくしゅう／天皇（帝）なども可 (b) あま／漁夫（「漁師」なども可）

問3 夕霧と垂れ込めた雲の中で海面を進む船が、まるで中空に吸い込まれていくような幻想的な情景。〔44字・解答例〕

問4 白き鳥

問5 ⑤

問6 (イ) 昨日は……余騎、

(ロ) 今日は……余人、

解説

問1 活用形に関する設問。助動詞や助詞など、接続する活用形の決まっている語を手がかりに考えていく。Aは未然形・已然形にだけ接続する接続助詞「ば」につながっているので、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」か已然形「ぬれ」かだが、文脈上仮定の話ではないことから、確定条件(「……ノデ」)を表わす已然形「ぬれ」を答える。Bは、形容詞「なし」が已然形にしか接続しない接続助詞「ども」につながっているもので、已然形「なけれ」しかない。Cは、八行四段動詞「こととふ(「言問ふ」)が連用形にしか接続しない助動詞「けん(「けむ」)につながっているもので、連用形「こととひ」を答える。

助動詞や助詞の接続は重要なポイントであるが、それ以前に用言や助動詞の活用についてきちんと知っておかなくてはならない。

問2 語の読みと意味の設問。「主上」は時の天皇を敬意を込めて呼ぶ言い方。近世以降には「しゅじょう」という読み方もするが、設問の条件にわざわざ『平家物語』からの出題であることに留意して」と断つてあるのだから、現代とは異なる方の読み方「しゅしょう」を答える。なお、天皇を呼ぶ言い方には「上」「上の御前」「帝・御門」「内・内裏」「今上」などの言い方があるので併せて記憶しておきたい。

問3 比喩説明問題。「半天の雲にさかのぼる」は比喩的な表現であり、実際に「雲にさかのぼる」訳ではない。これをふまえて説明することが大切である。この場面の情景は、傍線部直前に「雲海沈々……青天……夕霧……」などと描写してある。「半天」とは「中空、なかざら」のことであり、上からは雲がたれ込め、下からは夕霧に包まれている中を進む船の様子を「雲にさかのぼ

る」と表現したのである。夕暮れの月夜であることと、場面全体が落ちのびる平家の哀感に満ちた情景であることを考慮してまとめらる。

問4

指示内容説明の設問。「かれ」は現代語では「彼」で男性の三人称であるが、古文では「か」が現在の「あ」に相当し、人間に限らず離れたもの全般を指すことに注意したい。この場合は現代語の「あれ」といった意味であり、また会話部分の終わりに「……都鳥にや」と述べていることから、直前の「浪の上に白き鳥のむれゐる」の部分を指していることは明らかである。

問5

文学史に関する設問。「在原業平（＝ありわらのなりひら）」の残した和歌を中心素材として成立した歌物語が『伊勢物語』であり、古文の時代の人々の熟知していた作品であった。ここは中でもよく知られた第九段「東下り」の「から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」と「名にしおはばいざこと問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと」という二つの歌を踏まえて述べられている。在原業平はその後典型的な美男子として伝説化されたが、六歌仙・三十六歌仙の一人にも数えられる実在の人物で「在五」「在五中将」などとも呼ばれる。

問6

抜き出し問題。「平家の盛衰」「対句表現」という条件で本文を端から吟味していけばよい。抜き出し問題では通常2～3箇所程度の候補を比較検討して決める必要があるが、この場合は「盛衰」が「対句表現」で記されている「句」という条件からは、解答箇所しか候補がない。ただ形式面で「句読点を含む」という条件をきちんと守って答えることが大切である。

出典：『伊勢物語』 六十九段 / オリジナル問題

現代語訳

翌朝、(男は)気がかりであるけれど、自分の(方から)使いをやるわけにはいかないのです、たいそう待ち遠しく思いながら待つていと、夜がすっかり明けてしばらくたつと、女のもとから、(手紙の)文句はなくて、(歌だけ送ってきた)。

君や来し……あなたが(私のもとに)いらしたのか、(それとも)私が(あなたのもとに)うかがいましたのか、(何も)わかりません。(あれは)夢だったのか、現実だったのか。寝てのことだったのか、目覚めたのことだったのか

男は、たいそうひどく泣いて(次の歌を)詠んだ。

かきくらす……悲しみで真っ暗になった、乱れて分別を失った心の中で、何がなんだかわかりませんでした。夢(だった)のか、現実(だった)のかは、今夜(またいらして)はつきりさせてください

と詠んで(女に)送って、狩りに出かけた。(男は獲物を追って)野原を歩き回るけれど、心はうわの空で、せめて今夜だけでも、(周囲の)人を寝静まらせて、一刻でも早く逢おうと思うのに、(伊勢の国の)国司で、斎宮寮の長官を兼任している人が、鷹狩りの使いが(来て)いると聞いて、一晩中、酒を飲んだので(「酒宴を催したので」)(女と)まったく逢うこともできなくて、夜が明けるなら尾張の国へ出立しようとするので(「出立する予定なので」)、男も(心中悶々として)ひそかに血の涙(「血が出るほど深く悲しんで流す涙」)を流すけれど、逢うことができない。夜がしだいに明けてしまおうとする頃に、女の方から出す(お別れの)盃の(受け)皿に、(女は)歌を書いてよこした。(男が)手に取って見ると、

かち人の……徒歩で(河渡りする)人が渡っても(裾が)濡れない入り江のように、浅い、浅いご縁でしたのでと書いて、(歌の)下の句はない。(男は)その盃の(受け)皿に、たいまつ炭で、歌の下の句を書き足す。

またあふ坂の……また（人が逢うという）逢坂の関をきつと越えましょう〔Ⅱ浅いご縁でも、とにかくご縁があったのですから、きつとまたお逢いしましょう〕
と書いて、夜が明けると、（男は）尾張の国へと（国境を）越えて行ってしまった。

解答

問1 ①Ⅱ男は、女のことばかりであったが、

②Ⅱ男は、じれったい気持ちで

③Ⅱ男の心は上の空で

問2 私は、昨夜のことははっきり覚えていない。〔20字・解答例〕

問3 茫然自失 / あはむ（本文6行目）

問4 えにし
├── 縁（えにし）
└── 江（え）

要旨：あなたと私は浅いご縁でしたね。〔15字・解答例〕

問5 許されない男女が一線を越えて結ばれるという意味。〔24字・解答例〕

現代語訳

(もう) 昔(のことだが)、(ある) 男が、陸奥にあてもなく(旅を続けて) 行き着いた。そこに住む女が、都の人は普通と違った様子(「見慣れないので新鮮」に思われたのだろうか、いちずに(その男を) 思慕する心を持ったのだった。そこでその女は、

なかなか……なまじつか恋い焦がれて死んだりしないで、(夫婦仲が睦まじいといわれる) 蚕になるのがよかった。玉を貫き通すひもほどの短い命でも(「あなたと夫婦になれずに、なまじ恋にこがれて死んでしまうくらいなら、いっそのこと、あの夫婦仲のよいと言われる、蚕になってしまった方がよかった、たとえ命が短い蚕だったとしても、せめても好きな方と一緒にいられるのだから。」)

(田舎者の女は、詠む) 歌までもが田舎びていた。そうはいつでもやはり、(男は) しみじみと心打たれたように思ったのであろうか、(女の家へ) 行って(その女と) 共寝をした。(男は) まだ深夜の(暗い) うちに(女の家を) 出て行ってしまったので、女は、

夜も明けば……夜も明けたならば、水槽に投げ込んでしまおう。(あの) ろくでなしのにわとりが、まだそんな時間でもない(「夜も明けない」早いうちに鳴いて、(いとしい) あなたを帰してしまっただもの

と詠んだところ、男は、京へ帰ると言って、

栗原の……栗原の里にあるあの有名な「あねはの松」が人であるならば、京へのみやげに、さあ(一緒に行こう) と言うのになあ(あなたも人並みならば、京へ誘って連れて行くのに)

と詠んだところ、(女は男の歌の意味を取り違えて) 喜んで、「(あの人は私のことを) 愛していたらしい」と言っていたのだった。

解答

問1 めづらかに／や／おほえ／けむ形容動詞 助動詞 助動詞

問2 女の身なりや身のこなし〔解答例〕(「人柄」等でも可)

問3 にわとりが夜も明けない早い時間に鳴き男を帰してしまったから。〔30字・解答例〕

問4 お前が人並みの女であるならば、さあ一緒に行こうと誘って都へ連れて行くが、お前のような田舎者は連れて行くわけにはいかない。〔解答例〕

問5 女が歌の意味を誤解して、男に愛されていたと勘違いしている。〔29字・解答例〕

解説

問1 品詞分解の問題。「めづらかに／や／おほえ／けむ」と切れるのだが、形容動詞「めづらかなり」を認識できない場合があるかもしれない。「珍らかなり」とは、よくも悪くも普通とは異なるようすを指し、「珍し」(「ごくまれにしか見られないほどすばらしい」とは少し用法が異なる。しかし、もともとはともに動詞「愛^めづ」から変化してできた語である。動詞「愛^めづ」は、「心を引かれる、感心する、褒める」の意で、対象の持つ価値を積極的に評価する意味を含んでいた。こうした他の品詞から派生してできた語を派生語というが、もともとの意味と別の単語としての意味用法を見分けるためにも、やはり根源的な意味(基本単語の語義)を覚えておくことが大切であるのはいうまでもない。なお、形容動詞ナリ活用は、タリ活用より(入試古文における)頻度が高らかに高く、中でも連用形「〜に」の形で登場することが多い。副詞との識別の問題もあるので日常から辞書をよく引いて、用例を読むようにしてもらいたい。

問2 「さへ」(副助詞)の表現効果について考察する問題。「さへ」の語源は、下二段動詞「添^そふ」の連用形「添^そへ」であるといわれている。したがって、すでにある状態のうえに、さらにある事柄を添加する意味をあらわすのが基本的用法である。女は、本文4行目の「歌さへ」の、「歌」が「ひなび」(「田舎じみ」)ていたのだから、他の要素として考えられるのは女の「容姿」「身のこな

し」「人柄」などであろう。また、女のほうと対比されている男についても考えてみよう。男は本文1行目にあるように「京の人」であり、都会的で洗練されていたのだが、当時の貴族にとって、外見と内面とは一致するはずのものであった。その外見とは「容姿」と言いかえられ、内面とは「歌」によってかたち明らかになるものだったのである。この物語は、女と男の、「容姿」も「歌」も不釣り合いだった、そういう図式で考えればよい。

問3 理由説明の問題。設問文は傍線部(c)の和歌の初句～二句までの理由を説明させようというのだが、この歌は二句切れで、三句

「くたかけの」から結句「せなをやりつる」までが二句目までの理由になっているとみてよい。そこで「くたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」の解釈ということになるのだが、「くたかけ」は脚注にある通り「にわとり」のこと。「まだき」は、早朝の意で形容詞「未だし」の連体形。直前の地の文「夜ぶかく」に照応する。「せな」は、上代（奈良時代）東国地方の方言で女性が夫や恋人などを親しみをこめてよぶ言葉である。「兄な、背な、夫な」などと表記される。類語に「せこ」「わがせこ」がある。この女にとって、大切な男性が共寝をした後、早々に引きあげてしまったのを鶏のせいにしてやつ当りをしてよんだ歌ということになるのか。あくまで説明であるから、誰（何）が、いつ、どうした、の要素を満たすように丁寧にまとめてほしい。

問4 和歌の大意説明の問題。傍線部(d)の歌は句切れもなく、一見訳しやすそうではあるが、解釈のポイントは古典常識かもしれない。

脚注にもある通り「栗原のあねはの松」は固有名詞だがすぐ下の「の」は主格をあらわす格助詞。「くが人ならば」と解釈しなければならぬ。しかし、そう訳したところで意味不明ではないか。「栗原のあねはの松」とは注からわかるように「みちの国（陸奥）」の何かを暗示し、歌の中で「みやこ」と対比させられている。だとすれば「松が人（人間）だったら」「いざ（さあ）」と都へさそうのに、といった内容になる。男が相手の女をさして（暗示して）「あねはの松」と表現したのだとすればつじつまが合う。ここから田舎者が「人間」として扱われることのない哀感をよみとろうとすると近代文学になる。古典では「人」であることが貴族の価値観に基づいて判断され、そう表現されることも多い、その点はわきまえておこう。女が「都」にふさわしい「人」ではないので、都へ連れていこうにもどうしたってできないということなのだ。なお、文法上のポイントとして「くばくまし」（反実仮想）構文はぜひきちんと学習しておいてもらいたい。この場合のように「大意」を説明する設問では「もしくだったらくなのに」という訳の形そのままではわかりやすい説明とはいえない。正しくは仮定表現を使わない文章表現でなければならないのであ

る。

問5 傍線部の内容（滑稽さ）を説明する問題。「笑い」「おかしさ」を説明するのは「悲しみ」を説明するより難しいものだ。傍線部

(e)の女の言葉は、直前に「(女) よろこぼひて」とあることから、女が男の歌を聞いて喜んだのだとわかる。また「思ふ」とは、現代語と違って、男女間などの心の働きをさすことも多く「愛する」の意であることが多い。男の歌の内容が、女を人並みに扱えないので都へ連れて行くわけにはいかない、というのであったのに、女は（おそらく）仮定の表現が読み取れなかったかどうか、「都のつとにいざ……」という部分に自分への愛情があるものと勘違いしてしまったようなのである。よってこのことを説明するわけである。女が、男の歌の内容を自分への愛情だと誤解してしまったということが表現できていればよい。

L2J/L2

高2 東大 国語

高2 東大・京大 国語



Z-KAI

会員番号	
------	--

氏名	
----	--

不許複製